

元気のヒント

◁38▷



竹谷 善雄



山田 博胤

徳島大学病院循環器内科

「膠原病性肺高血圧症」とは「膠原病」の患者が「肺高血圧」を併せ持つようになった状態のことをいいます。

「膠原病」は一つの病気の名前ではなく、全身の皮膚や内臓に炎症が起こってしまう病気の総称です。主に関節痛や関節の変形を症状とする

「関節リウマチ」や、臓器に炎症が起きる「全身性エリテマトーデス」、強皮症、多発性筋炎・皮膚筋炎など、今で

膠原病性肺高血圧症

は50を超える病気が膠原病に分類されています。

一方の「肺高血圧」は、心臓から肺に血液を送る肺動脈の血圧が高くなった状態をいいます。膠原病の患者は、さまざまな原因で肺高血圧症を併発することがあります。本症は心不全の原因となり、生命予後を悪化させることが知られています(図参照)。

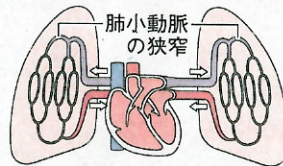
階段を上ると息切れしやすい、体がだるいといった症状は、本症に限らず、いろいろな病気が原因で現れます。しかし、発しんや、寒いところ指先が白くなるなどの皮膚症状、筋肉や関節の痛みやこわばりなどもある場合は、膠原病性肺高血圧症が疑われます。

また、膠原病で通院されている患者で、以前と比べて息

新薬で早期治療が重要に

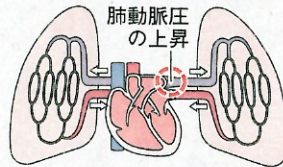
■ 病気の進行に伴う肺血管と心臓の変化 ■

発症期 (肺小動脈が狭くなる)



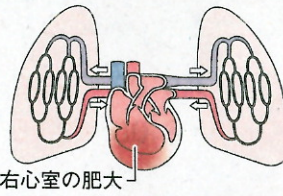
肺の血管が細くなり、血液が流れにくくなる
肺動脈の血圧が高くなる

病初期 (肺動脈圧が上昇する)



心臓は肺に血液を送るため、より強い力を出す
肺動脈の血圧がさらに高くなる

進行期 (心臓へ負担がかかる)



心筋の収縮力が低下する
右心室が肥大する

右心不全・全身の血流不足

進行すれば心不全にも

切れの症状が増してきた場合にも、肺高血圧症の併発を疑わなければなりません。数年前まで本症に対する有効な治療法はありませんでした。しかし、治療効果が高い薬剤が開発され、症状を軽減して病気の進行を抑えることができるようになりました。そこで、できるだけ軽症の段階で肺高血圧症を見つけ、重症になる前に治療を始める「早期診断、早期治療」が重要となってきました。せっかく使えるようになった治療薬でも、重症化してしまってからでは効果が乏しいためです。本症を疑った場合には、まず心臓超音波(エコー)検査を行い、軽い運動を行ってもいい、診断には、入院して肺動脈の圧力を測定する必要があります。

前述した症状が気になる方は、かかりつけ医と相談して、徳島大学病院循環器内科の肺高血圧症外来を受診されることをお勧めします。